

中口国境周遊紀 ウラジオストク～グロデコボ～綏芬河～ 牡丹江～延吉～図們～琿春

ERINA調査研究部研究員 李勤

2003年8月3日(日)から8月7日(木)まで、日本海横断国際フェリーの可能性調査の一環として、中口国境の交通状況、観光資源調査を目的にウラジオストク～グロデコボ～綏芬河～牡丹江～延吉～図們～琿春を訪問した。ここでは国境地帯の最新状況を中心に報告する。

ウラジオストクへ

8月3日の新潟は30℃を越え、この夏初めての猛暑となった。15時20分に飛行機に乗り込んだものの、TU154機は離陸するまでエアコンは効かず、ほぼ満員の機内はサウナ状態であった。幸い座席のポケットに団扇が備えられていたので助かった。乗客はロシア人中心で、ビジネスマン風の日本人旅客もいたが、観光客風の日本人は見当たらなかった。飛行機は1時間余の飛行時間を経て、ロシア時間19時10分に定刻通りウラジオストク国際空港に到着した。

通関手続きは1人当たり5分ほどで、荷物もX線検査のみであった。日本の旅行社のWさんから必ず印をもらうようにと言われていた「所持金申告表」は、税関職員に見せたところ「OK」とだけ言われ、印をもらえずに出ることとなった。しかし、同行したMさんの書類には印が押されていたため、現地ガイドのSさんに税関職員に聞きに言ってもらった。5分後、Sさんは印の押した書類を持って現れたものの、「今年から3,000ドル以下の持ち込みは自由になったそうなので不要になった」と教えてくれた。国際空港では問題ないとしてもこの先中国に向けて出国するグロデコボのような国境の陸路税関では本当に大丈夫なのかと半信半疑のまま書類を大事に仕舞い込んだ。



地図1 調査行程図(日本通運株式会社新潟旅行支店より提供)

ウスリースク中古車市場

翌4日(月)は9時30分にウスリースクに向けて出発した。ウラジオストクからウスリースクまでは約113kmの距離である。12時頃、最初の目的地であるウスリースク郊外の中古車市場に到着した。あいにく市場は定休日であったが、警備員の男性に話を聞くことができた。警備員の話によると、この市場は週2回開かれ、1回当たりの出展台数は2,000台に上る。今年の7月15日までは中古乗用車(車齢3~7年)の売行きが上々であったが、15日以降中古乗用車の購入税率が引き上げられたため、乗用車の販売台数が激減している。しかし、代わりに冷凍車、クレーン車などの専用車の需要が増えているとのことであった。

表1 中古乗用車の新税率

車種	税率(1cc当り)
1,000cc以下	0.85ユーロ
1,000~1,500cc	1.00ユーロ
1,500~1,800cc	1.50ユーロ
1,800~2,300cc	1.75ユーロ
2,300~3,000cc	2.00ユーロ
3,000cc以上	2.25ユーロ

出所：ロシアニュースサイト「lenta.ru」より。
注：1ユーロは126.7円(2003年8月28日現在)

グロデコボ中国商品市場

12時30分にウスリースクを出発し、120km先の中国国境グロデコボバスターミナルに向かった。道路は十分に整備され、豊かな大自然の中を走ること2時間、14時30分にグ



写真1 ウスリースク中古車市場(株式会社博達堂岩橋清文氏提供)

ロデコボバスターミナルに到着した。駅はロシア人と中国人観光客で賑わっていた。まず、現地ガイドのSさんの案内で、中華料理のお店で昼食を取ることにした。メニューにはロシア語と中国語が並記されていた。見渡すと私たちの日中混合チーム以外の客は中国人ばかりであった。店主の女性はハルビン出身で、料理の味も確かに懐かしい中国東北の料理であったが、少しロシア風にアレンジした餃子なども印象的であった。昼食を済ませ、駅の右側にある「中国商品市場」の取材に出かけた。市場は40~50軒の店が建ち並び、衣類、靴、日用品が揃っている。経営しているのはほぼ全員中国人であった。店主の中には南方訛りの人もいた。出身は中国東北部に限らないようだ。30代前半の靴屋さんの男性主人に話かけてみると、「商売は繁盛しているよ。今の時間帯はお客が少ないけど、午前中は多い。商品の仕入れは専門の担ぎ屋さんに頼んでいる」と誇らしげに言った。



写真2 グロデコボ中国商品市場(株式会社博達堂岩橋清文氏提供)

グロデコボからのロシア出国

市場取材を終了し、切符売り場に戻るとガイドのSさんから、私たちが乗る予定の16時20分グロデコボ駅発のバスは最終バスで、時に来ない場合もあると言われ、不安が募った。それでは、今停まっている数台の定期バスの切符を買ってはどうかとSさんに尋ねると、これらの便の切符は売り

切れだと言う。16時20分のバスの到着を祈るしかない、切符売り場の窓口に張りつき、はらはらときどきしているうちに、16時20分発のバスがやってきた。置いていかれないように大急ぎ切符を買い、バスに乗り込んだ。しかし、私たち以外の乗客は慣れているのか、それほど緊迫感を見せなかった。

バスは満員だった。乗客の割合は私たち調査団の日本人4人を除いて、ロシア人と中国人が半々であった。15分ほど走るとバスが停車した。先に列を作っているバスは私たちより先に駅を出発したバスのようであったが、ここは出国ターミナルの待合場の役割を果たす野外地だった。乗客の多くはバスから降り、トランプで遊び始めた。このバスは最終便だと思っていたので、23時（中国時間20時）に出国窓口が閉まるので、その前に通してくれるのだと思っていた。しかし、私たちが乗ったバスがこの待合場に到着した後、ほぼ15分間隔で定期バスが続々とグロデコボ駅からやってきた。そう、私たちが乗っていたバスは最終ではなかったのだ。

待合場の中央にある建物は、観光税の徴収場であった。1人当たり450ルーブル（約2,000円）が徴収された。観光税事務所の隣に、大きな「今後の国境建設計画図」の看板が立てられていたのが目立っていた。また、待合場の敷地の中にはレストランや雑貨屋もあった。以前は秘密が多く、緊張感が走っていた国境が明るい雰囲気に変化していることを実感した瞬間であった。

延々4時間待機し、やっと私たちのバスが出国ターミナルへ向かう順番がやってきた。夕日を浴びながら出国ターミナルに向かった。途中2回ほど国境警備隊員が乗り込み、パスポート審査を行った。ロシア時間の21時、待ちに待った出国審査が開始された。荷物はX線検査を受けるのみで、開けられることはなかった。心配していた「所持金申告表」も必要はなかった。国境通過手続きが簡素化したことが身を持って体験できた。バスの乗客全員の検査が終わったのは21時30分が過ぎたころだった。

バスは中国国境に向かって走る。途中中国国境警備隊が乗り込んで1回のパスポートのチェックがあった。中国時間18時50分には中国綏芬河口岸に到着し、1人当たり3～4分足らずで通関できた。綏芬河市幹部のZさんは朝10時から待っていてくれた。Zさんの話によると、最近観光客が急増しているの、夜中の2～3時にロシアを通関して来る人もいるという。それに対しても通関の受付が柔軟に対応しているのだ。



写真3 グロデコボ出国ターミナル待合場
(株式会社博進堂岩橋清文氏提供)

活気に溢れる綏芬河

綏芬河市内に入り、まず感じたのはあちこちで建設工事が行われていることであった。3年前にはそれほど高層ビルがなかったこの町は見違えるほどに高層マンションが林立し、ロシア人向けの市場「青雲市場」も拡張建設を行っていた。中国沿海部からの投資が増え、不動産価格が2倍に高騰したと紹介された。日暮れの時刻にもかかわらず町は人の往来が激しく、あちこちが賑わっているのがとても印象的であった。19時40分には綏芬河を後にし、今日の宿泊先である200km先の牡丹江に向かった。

牡丹江周辺観光資源の数々

翌5日(火)は朝8時30分に出発し、牡丹江市内から100km離れている牡丹江上流にある渤海国遺跡、鏡泊湖に向かった。道路はコンクリートの片側1車線の国道で、路面の状況は良好であった。

10時30分頃渤海国遺跡に到着した。渤海国は7世紀に靺鞨族が建国した国であり、日本との交流が盛んであった。都城は唐の長安を手本に造られ、外城、内城、宮城の3部分で構成されており、外城の一部は現在も残っている。

遺跡の0.5km先に1662年に清朝が建てた興龍寺がある。高さ6mの渤海国時代の石燈籠や仏教の石刻など重要な文化財が多く保存されている。

続いて、鏡泊湖へ移動した。鏡泊湖は1万年前の火山噴火で生まれた湖で、面積は95km²に及び、中国の最大の火山湖である。この周辺には4つ星の高級ホテルや別荘が建ち並び、川魚料理が楽しめる。

現在これらの遺跡や自然景観はまだ多くの外国観光客に注目されていない。これが今後北東アジア観光開発の上で、重要な観光資源となることは間違いない。

14時、鏡泊湖を出発し、当日の宿泊先の延吉に向かった。寧安から未舗装の村道を30分ほど走り、ようやく舗装され



写真4 渤海国遺跡 - 外城



写真5 興龍寺 - 渤海国時代の石灯籠



写真6 鏡泊湖

ている国道に出た。その後更に山道を走ること5時間半、目的地延吉に到着した。

図們江中朝国境大橋

翌6日(水)は大雨の中、図們国境大橋に向けて延吉を出発した。約1時間半車を走らせて中朝国境大橋に到着した。ここは国境観光名所となっていて、1人当り30元(約450円)入場料を払えば、誰でも国境の高い門の屋上に上ることができ、写真撮影もまったく規制はなかった。この自由撮影の実現は北朝鮮側が態度を緩和した現れでもあると感じた。

国境門の中の土産屋を覗いたら、昨年9月に小泉総理が訪朝した際の写真が北朝鮮の切手になって売られていた。

図們国境大橋から次の目的地琿春に向かう途中、朝鮮族の民家を訪問した。突然の訪問にもかかわらず快く家に上げてもらった。純朴な人々の暖かさに触れた瞬間だった。

写真7 図們国境大橋からみた対岸の北朝鮮
(株式会社博進堂岩橋清文氏提供)

琿春中口自由貿易区

琿春边境開発区の責任者の出迎えを受け、中口自由貿易区内の市場に案内された。市場と言っても露天ではなく、建物の中にある。日用品や衣類などが並び、ロシア人商人が買付けに来ていた。

その後、出国荷物倉庫に案内された。市場で商品を購入した後、出国荷物倉庫で検査を受けるという。倉庫では出国を待つ人の休憩場ともなっているようだ。中には子供たちの姿もあった。同管理者の話によると、中口国境荷物持ち込みの免税制限は年齢に関係なく、ロシア側規定では1人当り50kg以下、中国側規定では1人当り3,000元(約4.5万円)以下となっている。制限内で一度により多くの品物を運ぶことができるように、子供たちが夏休み期間中に親に連れられてきているとのことだった。同貿易区は1日平均500人が来場し、15万元(約225万円)の取引が行われている。



写真8 琿春中口自由貿易区出国荷物倉庫

まとめ

長い陸路調査を無事に終え、振り返ってみて感じたことは、まずこの地域の道路状況は良好であることだ。次に、

中口間の国境通行については、ロシア側国境通関の所要時間の短縮は今後の課題ではあるが、通関時間の延長などの面において柔軟に対応していることは評価できる。また、グロデコボ駅、綏芬河、琿春中口自由貿易区などの国境地帯では多くの人々が往来し、この地域の発展は確実に前進していることが実感できた。

北東アジア地域の観光の面においても、現在中口、中韓間の往来は既に行われており、増加傾向にある。私見ではあるが、北東アジアに一番近いヨーロッパの町ウラジオストク、陸路国境グロデコボ～綏芬河、歴史を語る渤海国遺跡、絶景の鏡泊湖、中口自由貿易区など、日本人にとっても面白い観光資源がこの地域に多く存在し、開発する余地は多く残っていると思う。観光交流を活発化させることにより、北東アジア地域の相互理解を深め、地域の安全と繁栄にもつながると思う。